

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程3年 (橋本 紘樹)

2019年2月1日から9日にかけて、ハイデルベルク・ストラスブール派遣プログラムが実施された。京都大学文学部とハイデルベルク大学文化越境 (Transcultural Studies) 学部の修士課程における、ジョイント・ディグリー制の設置を機縁としたものであり、ここ数年恒例になっている。私は一昨年に引き続き、引率という (分不相応な) 身分で、2度目の参加となった。訪れる土地は同じでも、不思議と景色は違って見える。訪問した施設やワークショップに関しては他の参加者の方々が個別に報告し、ストラスブールで得た経験の全体像を引率の横田さんが描いてくれることになっているので、ここではハイデルベルクでの印象を総括したいと思う。

ハイデルベルクでの滞在は、初日からトラブルに見舞われた。ホテルの給湯システムが壊れ、シャワーからは冷水しか出てこなかった。翌朝フロントに事情を聞きに行くと、既に修理済みだと言われ、なぜか逆に怒られてしまった。ともあれ、これでようやく温水を使用できると思った矢先、今度は市内の水道に問題が生じたようで、ハイデルベルク全域で水道水の使用が禁止となった。フロントの対応も、水道水の件も、どちらもこれまで日本で経験のないことだったので (ドイツでもかなり珍しい状況なのだろうけど)、改めて異文化というものを肌で感じた思いだった。一方で、ハイデルベルクの人たちの優しさに触れることもできた。ハイデルベルク城を訪れた際には、併設のレストランの方が、危険性のある水道水を使用してはならないことを、私たちにも理解できるドイツ語でとても丁寧に何度も説明してくれた。外国人である私たちにその情報が行き届いていないと思ったからだろう。

さて、プログラムのメインともいえるハイデルベルク大学の学生とのワークショップは、知的刺激に溢れていた。特に、中国における人口増加と環境問題との関係についてのプレゼンテーションが私の印象に強く残っている。都市部へ人々が流れ込むことで、農村部は荒廃し、都市の環境は悪化するという事態を緻密に分析し、人間の活動と自然がいかに密接に関係しているかを明瞭に理解させてくれるものだった。「人」と「自然」に根拠のない境界線を引き、いつのまにかそれを当然のこととみなしていたことに気づかされ、目の覚める思いだった。カム先生がワークショップの最後を、「自然とは何か?」という問いを全体に投げかけることで締めくくろうとしたのも、そうした認識を私たちが持てるよう促す、という意図があったからだろう。思えば、「人文社会学はいかにエコロジー・スタディーズに貢献できるか」というのが、今回の派遣プログラムのテーマだった。私たちが現在当然だとみなしている枠組みや考え方を省察し、「自然」に関連する問題を「人」を含む様々な要素の複雑な絡まり合いのなかで捉えることのできる視座を持つこと。その重要性に気づけたのが、私にとって何よりの収穫であった。さらにいえば、当然を疑うことは、学問の領域を超えてとても大切な思考だとも思っている。先に述べたホテルのフロントでの出来事一つをとってみても、なぜ相手が怒ったような態度をとっているのか、自分の考えや思い込みを括弧にくくり、きちんと考えれば理解できたのかもしれない。大げさかもしれないが、そこには他者理解の可能性が広がっているのではないだろうか。自分には理解できないと思った時にこそ、理解しようとする姿勢が必要になってくる。派遣プログラムを通じて得たのは、まさにそうした認識に他ならない。

平田先生、カム先生、国際交流推進室のみなさま、シャール先生をはじめストラスブール大学の人たち、ハイデルベルク大学関係者、および現地で私たちと交流してくれた方々。このような素晴らしい派遣プログラムを作り上げてくださった全ての人に、心からの感謝を最後に申し添えておきたい